

## 社会調査データベースと書誌学的想像力

Social Research Data Archives and A Socio-Bibliographical Imagination

佐藤 健二

ご紹介いただきました佐藤健二です。佐藤という苗字が同じですので、紛れないように名前の方を強調して使わせていただきます。私の方は原先生や博樹さんの方と違ひまして、ここ札幌学院大学でおつくりになっているSORDデータベースのライブラリーに収められるような質問紙調査をあまりきちんまとめてこなかった。どちらかといいますと、いわゆる「質的」な領域とされている、歴史的な問題や資料を扱ってまいりました。具体的には、柳田国男の文化研究の方法論などを中心に勉強してきて、そこで文献資料中心の歴史研究と、社会学や人類学のようなフィールドワークによる資料の収集と解釈をつなげるような領域で、いろいろ意識研究の素材を扱ってきたということでございます。一方で、社会調査の歴史について興味をもっていることもあって、今日はみなさんにいろいろとお教えられるだけだと思っております。

今回「データアーカイブ時代における情報の生成・蓄積・活用」というテーマを与えていただきました。改めて自分が具体的な研究の中で扱ってきた資料、データについて、少し考え直してみました。やはり原先生や博樹さんが言われていたように、データの蓄積の仕方、共有の仕方は大切な問題ですが、さらには歴史学などでいう「史料批判」をも含めた、社会学的な資料批判の論理の生成もたいへん重要だと感じました。資料批判の論理学



佐藤 健二 氏

は、なかなか社会学では議論されないまま、データをどう利用するかが先行してきた部分があります。しかし資料批判に裏づけられた読解力・想像力をどうデータベースが生み出してくるのか、データライブラリーが生み出していくのかという点は、先ほど来のお話でも大切なテーマになっていたと思うのです。

私の場合、とりわけ関心をもち続けてきましたのがコミュニケーションの歴史の中で言いますと印刷メディア、つまり書物というテクノロジーがわれわれの思考や意識の様式をどう変容させたかという問題です。マクルーハン風に言えばゲーテンベルク・テクノロジーと言ってもいいのですけれども、印刷が社会的に浸透し発展しながら生み出した文化の一

つに、図書館というデータ管理のシステムがある。それらの可能性と限界とを一方で念頭に置きながら、今日ここで問題にしているような電子的なデータや社会調査が生み出してきた資料を考えていくことは有効なのではないか。その線に沿ってお話をしてみたいと思います。

### 文化財としての調査資料

実はこのデータライブラリーのテーマを与えられて、新國さんの論文やそこで参照されている報告書などを中澤君から送ってもらったり、世論調査協会の雑誌をひっくり返したり、にわか勉強をいたしましたのですが、池内一さんがデータは文化財であるという議論をおおよそ30年前におやりになっている。私は非常に懐かしく思ったのです。なぜかといいますと、大学院生の時代に最初に歴史的な資料として扱ったのが、池内先生旧蔵の戦時下の流言蜚語データの発掘と再分析だからです。池内さんは第二次世界大戦の末期に海軍技術研究所におられて、当時憲兵隊が取り締まっていた流言蜚語を一種の潜在的世論のような形で分析しようとしていた。ここには社会学の清水幾太郎や尾高邦雄、心理学の兼子宙、宮城音弥、評論家の中野好夫など、いろいろな人が関わっていたらしい。ある意味では、戦時下の社会意識研究でもあったのです。

そのもともとの資料（正確に言えば、その写し）を、実は戦後まで池内先生はお持ちだった。しかしながら、世論調査研究へとグッと傾いて行って、戦時下の流言資料は数量的に分析するには非常に限界があると、1950年代の論文でふれられただけでした。たぶんそこにも社会意識研究の基本的な方法が戦後、世論調査・態度調査の手法中心に変わってきたあたりが象徴されているのだと思うのですが、けっきょくこの資料は池内さんという個人の研究者の書斎に封印されてしまう。

この資料の再発掘と生成過程の歴史社会的な分析が、私の助手時代に書いた最初の資料学的な論文だったので。

たぶん私は意図的に池内さんの「文化財」という言葉を拡張しているのですけれども、文化財（文化資源）として調査原票レベルが保存され、分析結果だけではなくデータそのものが共有されなければならないという。池内さんによっては生かされなかったその文化財の一部が、ご遺族によって捨てられなかったから私のところで論文の素材になった。これは先ほどの原先生のお話でも出てきましたように、研究者が集めた資料の中で生かされずに集めただけで利用できなかった、そういう資料の固まりまで含めて、文化財と考えてよい小さな一例だと思うのです。その積極的な概念拡張のためには社会調査のプロセスというものを、すこし丹念に微細に描きなおす必要があるのではないかと思います。

マクラのつもりが長くなりました。レジュームに戻って、いくつかの問題提起をさせていただきます。1つは「印刷物としての質問紙」という、ちょっとひねった題名になっております。これは先ほど言いました図書館という情報管理システムと、社会調査が生み出してきた質問紙調査データライブラリーの積極性を、かなり統合して考えてみようとするとき、基本にすえておくべき考えかたの一つではないか。

2番目に、調査プロセス総体をきちんととらえた上で、データライブラリーやデータアーカイブの基本設計を考えていく必要があるのではないか。そのためには社会認識の生成プロセスとして、問題意識のありかたから報告書への盛り込み、あるいは脱落というあたりまでを一貫してとらえる必要があるのではないか。

3番目に、やや視野を広げ情報資源のとらえかたを深めるための事例として、ロナルド・ドーアさんの『都市の日本人』というモノグ

ラフをとりあげたい。岩波書店が青井和夫・塚本哲人訳で1950年代に出しましたが、もとは「City Life in Japan」という英文の著作で、邦訳版とはすこし差異があります。この社会調査が残した資料を一例として取り上げ、調査が生み出す資料というものをどうとらえたらいいかについて少し考えてみたいと思っています。

### 印刷物としての質問紙

さて、まず最初の「印刷物としての質問紙」ですが、これは、質問紙調査のいうならば下部構造です。調査票はSSM調査の基本財産でありましたし、社研のデータアーカイブの労働調査の部分の基本的な資料も質問紙原票の形で保存されています。しかし社会学の中では、質問紙を使う調査と聞き書きの調査を、基本的には「量的」な調査と「質的」な調査というかたちで分ける考え方が伝統的にあるし、今もやはり超えがたく考えている人たちがいるわけです。

私は『見えないものを見る力』（八千代出版）という社会調査のテキストを、法政大学の山田一成さんと書いたのですけれども、この中では「量的」と「質的」を何か対立的で相補いあわなければならないものであるかのように考える思考から、意識的にできるかぎり距離をおいて書いたつもりです。「量的・対・質的」の対立意識について、結論だけを申しますと、私は1950年代につくられた言説上の対抗であったと思っています。冗談に社会調査論の「55年体制」といったりしていますが、その対立に明確な形を与えてしまったのは、1958年刊行の福武直『社会調査』（岩波書店）だった。あの岩波全書版の『社会調査』には、質的な調査研究とは非数量的で非統計的な調査研究であるという、相互に閉じた否定形の定義が明確に出てくるのです。そうだとすると、定義上もう融合するはずもない別物なのだから、あとは相補い

あいながら協力していく以外はないという、折衷的な結論しか残されていない。この二つがほんとうに原理的に分割されざるをえないかに認識が遡っていかないのです。

A対BにおけるBとは非Aである、ゆえにA対非Aであるという、いささか融通無碍な排他背反の思考は、やはり今みると大きなつまずきの石になった。これが研究法全体にかかわる分類として、大文字化して使われた弊害というものがあつたのです。質的な研究か量的な研究かとの規定にはこだわらずに、具体的なデータをどういうふうに読んでいくのか、観察や言説をどう生かしていくのかということからだけ、論理を立ち上げればいいのかというのが、私の基本的な立場です。

質問紙（調査票）を外在的な「標準化」の一言で切りすてるのではなく、その意義をどう論じ直せるかは、たいへん象徴的な一例です。とりわけ「質的」調査を任ずる人たちは、質問紙は様々なかたちで必要な要因を切り捨てている、人々の反応を鑄型にはめ込むような手法だと批判する。もちろん、そうした一面があることは注意しておいていい事実で、重要な警告です。しかし翻って、質問紙を使いさえしなければ、人々の意識をありのまま丸のまま、鑄型にはめ込まずに認識できるかといえば、それはまったく保証の限りではない。二項性に縁どられた全否定の発想は、倫理的ではあっても、方法的ではない。私は、『見えないものを見る力』でも触れていますが、質問紙が開いた可能性というのは非常に大きいと考えています。ひょっとすると「革命」といってもいいくらい（印刷革命を念頭においてですが）大きい。私について、見田宗介直系の質的な調査陣営の方法論者だと思っている人からすると、ほとんど反動的で利敵行為のように聞こえるかと思うのですけれども、戦いそれ自体がいろいろな誤解のうえに成り立っているのだから、弁明もまたしかたがない。質問紙の力とは何かというと、その

基本は印刷されているというところにあるのです。

今日の午前中のお話しで原先生がデータの行列の議論をされましたが、質問紙調査では印刷されていることによって、実は変数と値とが基本的に行列の形式を獲得した。これはあたりまえのような指摘ですが、印刷されていないければ、データ行列を作り上げること自身がたいへんなのです。あとでドーア先生の調査票のお話を少しいたしますが、あの時代の調査票ですと、記入票と質問票が分かれています。しかも現実はどういうことが行われてたかと言いますと、記入票すらそこに直接書かれているわけでもなくて、質問票と記入票を前提にし参考にしながら学生たちが自由な形式でのレポートを書いているのです。そうなると、どれも標準化されていない。ドーアさんはこれを統一的に扱うのに、データ処理するのに大変苦勞をされたと思うのです。書き写したり、切り張りをしたり、いろいろな処理を工夫して中間的な集計、すなわち一覧しうる手段を構築しているのです。

ところが、質問紙調査の調査票はご存じのように、同一のものとして印刷されることによって、同じ変数の値がデータとして同じ位置への記入が保証されている。複製技術としての印刷は、そうした形式を可能にしたのです。その時点でデータは空間化されているといっている。調査票という紙の上でのインターフェースの設計にデータの空間配置の形式的な同一性があればこそ、先ほどの行列のような変数のセットがきちんとしかも素早くできるという、対応関係を持っているわけです。

#### 四つの要素の複合体として

もう少し踏み込んで言いますと、印刷物としての質問紙というのには4つぐらい意味がある。

1つは、それが問いのリスト、すなわち問題意識の一覧表であるということそれ自体の

意義です。質問紙（調査票）をつくることは、その問題にどういうふうに入り込むか、その現象をどう問うか、どんな変数と関連づけるか、そういう問題意識の一覧表です。調査票をつくっていくプロセスの中では、まさにわれわれ研究主体の側の問いのたてかたそのものが、意識されざるを得ない。もちろん直接に聞けることだけが問題のすべてではないですから、聞けない部分をどう代替するか、あるいは切りすてるかも含めて、問題を立て直さざるをえないかもしれない。そういうプロセスを経た作品として、調査票があると思うのです。

2番目に、それは確認リストでもあります。チェックリストです。変数として設定したのだから、値をちゃんと取り忘れていないかという、チェックリストの要素もきっちり内在しています。聞き忘れがないか、漏れがないかどうかを、空欄で表現する仕掛けなしには、ひとはしばしば聞くことを忘れ見失ってしまう。

3番目に、これは当然すぎる指摘に思われるかもしれませんがマニュアルである。順序立てた行動指示の台本になっているからこそ、多くの人たちによる分業してのデータ収集が可能になってくる。マニュアルに添いさえすれば、誰でもがデータの収集作業を分担することができる。そういう意味での共同作業が可能になったのは、この質問紙という形式の、ある意味で言えば発明があったからです。

それから4番目に、象徴的な意味も含めカードとしての意義について。一つには、さきほど述べましたような同じ場所に同じデータがある空間性です。午前中、社会調査技法の「先史時代」のお話の中で、ポールソーティングカードという、縁にいっぱい穴が開いていて、その該当箇所を切っておいて、棒をさしてふるい落とす。原先生がおっしゃったあれも、やはり同じ場所に変数の値があるというデータの空間的配置において可能だった

わけですけれども、質問紙調査は多くの場合冊子形式でありながら、本質的にはそうしたカード性をもっている。カードであればこそ、バラバラにして並べなおし、組み合わせを変えることでできる。それが、カードであるという含意の第二の意味です。

たとえば自由回答の分析など、やはり捨てるのが惜しいものですから試みる。自由回答の分析というのは、だいたい調査の裏表紙の方にやっていて、そのページだけコピーをし、個票番号とか簡単な属性がきちんと記入できるようにしておいて、それを並べかえていると分類するという、そういうようなかたちでやるのが多いのですけれども、それが可能なのは、質問紙が基本的にカードだからだと。「知的生産の技術」としてカードを非常に重視した方がいらっしゃるけれども、それは偶然ではないのです。

こういう4つぐらいの要素を可能にしたのは、いずれも印刷されたものであるという点なのです。書物の歴史でいうと、「刊本」「版本」ということになります。木版も含めた印刷技術による複製です。それに対して、「写本」という手書きによる複製も書物の生産の中ではかなり長い時間続いていたわけです。調査票のことを考えますと、基本の枠は印刷をされていて、そこに書き込みというかたちでテキストが書かれている。刊本と写本の複合体のようなものが我々が調査票として扱っている資料です。この刊本と写本の違いが書物史の上でどういう意味があったかという議論に深入りしていると大変なので、今言いましたような質問紙が、2つの構造的な特質を併せ持つ資料だという点を押さえておきたい。そう考えれば書き込みの分析として、じつは質的な分析だとされている内容分析などにもつながっていることもわかりだと思えます。

### 作品としての調査票とライブラリー

データライブラリーの議論に戻ると、最初

に指摘しました問いの一覧表、問題意識のリストであるということ、それ自体の意義をもうすこし強調しておいていいのではないかと、私は思います。ですから調査票それ自体を蓄積し、図書のように所蔵を調べて引き出せるようにしていく意義はある。あえていえば、書き込みというデータの中身がなかったとしても、調査票それ自体を蓄積し公開していくことに固有の意味が生まれうるのだということです。作品としての調査票という考えに立つならば、そのような主張が成り立つでしょう。

たとえば、ドーア先生の『都市の日本人』を見ますと、最終のモノグラフには残念なことに調査票が載っていない。調査票が載っていないために、著者がどういうデータ収集のための問いをたてたのか、そこが見えない。単純な歴史的資料という以上に、この本の解読のために役立つはずだと主張したい。つまり、ドーアさんはいくつもの調査票を使っていますけれども、その問いの集合は、著者自身が書いたこの本の解読の補助線として使える。

書物をひとつのモデルに、データアーカイブのとらえ方を重ね合わせて、こうした資料群を考えていくと、調査研究が生み出す「書かれたもの」の多様性というか、データの多段階性がみえてくる。一方に、報告書としての、作品として最終的な刊本がある。途中段階でこれも刊本のような複製が制作されることのあるコードブックがあり、それにもとづくデータの数列や、自由回答の部分のようなテキストデータがある。さらに調査票それ自体というレベルで印刷されたものがある。そういうような多次元的なデータ空間を考えていく必要があると思うのです。

社会学の中では、現在の把握がどうしても優先される。それ自体は社会学という学問のアクチュアリティの一つの根拠でもあったわけですが、一方で現在というより新しい時期

が特権化されるがゆえの弊害も無視できない。つまりただ今現在の社会の状態はどうなのか、それを研究するために役に立つより新しい資料だけが有効なのだという、いささか近視眼の「現在中心主義」で、それがデータアーカイブを推し進めてこなかった1つの理由にもなっていると思うのです。調査票それ自体がこの研究者の1つの作品であるというとらえ方は、そうした理解への批判でもあります。

二次分析という議論も、データをただ数列としてだけ単純にもらってコンピュータの中で動かしてみるというレベルの再分析だけではありません。調査票そのものを評価し、批判することは、最終的な報告書なり論文なりに盛られた結果の評価とは違う射程をも浮かびあがらせるでしょうから、それも二次分析の重要な素材です。歴史的な厚みを持って多次的にデータを取り出せる。それが社会学における歴史的な認識の厚みを回復していく。その点で、SSM調査の再コード化は1つの重要な、先駆的な取り組みだったと思います。単純にパネル調査であることにSSM調査の意味があるのではなく、むしろ歴史を遡る問いを受けとめうる資料として、組織的に保存されたがゆえに複合的な要素をもつデータベースになりえた。そのことに、私はSSM調査研究の基本的な意味の一つがあるのだろうと思っています。

極論ですけれども、実はたとえデータがなくても、調査票だけであってもちゃんと集めることが行われていいのではないかと思います。ドーア先生の『都市の日本人』関係の資料をみますと、先生は調査票をつくるときに、いろいろな同時代の調査票を参考にしたらしく、偶然にも1950年代の前半ぐらいの調査票がいろいろと含まれているのです。これは失われやすいものだけに、社会調査史にとっては貴重な資料でしょう。理論的な著作だけが、社会学史を構成するわけではないのです。

ただ問題は、このような資料は集中して保

存している機関がなく、図書館では基本的に扱いません。図書館の現在の蔵書管理システムの中で、一枚刷りの資料やパンフレットの類、写真などは、所蔵の管理だけに限ったとしても扱いがなかなかむずかしい。奥付などの刊記があって、出版社も明記され、書物を同定できる固有のタイトルがあるという基本形からかなり外れているので、刊本中心の図書館的なデータ管理のシステムの中に入れていくのはむずかしい。たとえば錦絵のような資料のむずかしさについて、後で時間があれば新聞錦絵を題材にしてお話ししようと思いますが、調査票もまた、単純に図書館業務の範囲の拡張ですまされないような、資料学的な問題を含んでいることは指摘しておかなければなりません。

## 社会調査史の不在

2番目の話題に移りたいと思います。調査プロセスを、総体としてとらえる必要についてです。社会学の中で社会調査の意義は、いくつかの二項対立によって歪められてきました。たとえば「理論」と「調査」という対語です。理論と調査は原理的に分けられるものではない、それは統合されなければならないと言いながら、私は理論屋だからとか、調査屋ですからという防御線の張り方にみられるような、ある断裂があります。社会学史を考えてみますとはっきりするのですが、ほとんどは理論史・学説史で、調査史のような実践史は、なかなか社会学史に入ってきていない。つまり調査史が欠落している。もちろん、日本の学史だけではないかもしれません。

これに対して、いくつか掘り起こしの試みがあって、1つは、先ほど博樹さんが言っていた労働調査論研究会が、労働調査の歴史的な展開をまとめた。その『戦後日本の労働調査』を見て感動した農村社会学の一部の人たちが、農村社会学の分野で『戦後日本の農村調査』をつくった。しかし、この2つの書物

では、明らかに資料性という点での水準が違っている。理由はいろいろとあると思いますが、その1つに、労働調査の場合には前提となる調査票の個票がかなり残っていた。農村調査では、そのような基本資料を解読すべき対象として押さえられなかったことが記述を少し甘くしている傾向、つまりできあがった報告書の書評集のような関わりに囲い込まれてしまっている側面があると思うのです。いいかえれば、調査プロセスをぶ厚く取り扱う準備のちがいのようなものを感じるわけで、研究主体の問題という以上に、資料のありかたに制約されている。

これ以外にもちょっとふれましたような「数量的」と「質的」という対立があり、また「現在」を対象とするのか「歴史」を扱うのかという一見まともではあるがあまり考え抜かれていない対立や、さきほど論じたような現在中心主義の問題があるのですが、ここはすこし省略します。ともあれ、こういう不毛な対立は乗り越えられる必要がある。そのためには社会調査の意味を基本のところで検討し、すえ直す必要がある。調査のプロセスにおいて、我々はどういうふうに社会に対する認識をつくり上げて行っているのか、そこをもういちどテーマ化してきちんと議論していかなければならない。

### 社会調査論と認識の生産

そのような認識論的な反省が社会調査論の中で十分に進んだとは、私は思っておりません。書物や論文の集合として社会調査論を考えますと、1970年ぐらいまでの間は論争を含め、いろいろなかたちで出されていたのですけれども、その後かなり少なくなっている。80年代になって、また少し出てくるということがあります。

文献の側から社会調査論の歴史を概観しますと、日本において社会調査を題名にした単行本で初めて出版されたのは、1933年の戸

田貞三『社会調査』（刀江書院）です。これをもとに戸田貞三・甲田和衛共著の『社会調査の方法』（学生書林）という本が戦後出ますが、33年版の部分的な改訂増補だというふうに考えた方がいいものです。そして1958年に福武直『社会調査』が出て、1960年に安田三郎『社会調査ハンドブック』（有斐閣）が出る。そこに関連しながら質的な分析と量的な分析をめぐる論争が行われることになります。ところが、70年に『社会調査ハンドブック』の改訂再版が出たあたりから、パタッと社会調査関係の論争がなくなっていくのです。

80年代になって、教育という文脈がつよく現れた形で、たとえば原先生も関わられた『社会調査演習』（東京大学出版会）がでる。あれはもともとは安田さんが50年代末から段階的に用意されていた『社会調査実験マニュアル』（謄写版、安田三郎刊）をヒントにかなり改訂され現代的にされたものだと思うのです。80年代から90年代にかけて、社会調査の教科書が出てくるのですけれども、明らかに文脈が変わっていて、教育用という意味が支配的です。

つまり大きな傾向としては、社会調査論の中でも認識論的な議論が行われ、方法論と認識論と絡め合いながら論じられていたのは、70年代のあたりで1つのピークが過ぎて、あとはもう実用的な、あるいは教育の場で使えるものということになっていくのです。

もちろん70年代までの議論にも、大きな問題があった。その一つは社会調査の定義です。問題とすべき社会現象の存在を前提としたうえで、その実在を観察し記述・分析する過程と社会調査を位置づけるという、非常にオーソドックスな考え方が、現象学のインパクトやオリエンタリズム批判以降の今もなお前提になっています。これはたしかに基本的には無視できない考え方だと思うのだけれども、そこで徹底しなかったのは、社会調査の

実践を認識の生産プロセスとして徹底的に対象化する姿勢です。対象を正確に観察し、ありのままにとらえるという点を重視するような社会調査論では、一次資料や一次的収集の「一次性」がいささか無前提で賞揚される。つまり、二次資料よりも一次資料が、二次分析よりも一次分析が価値があるという形で、一次性が特権化される。現地調査による資料収集の直接性を分析とは切り離れた形で重視する。50年代の社会調査の定義には、そうした傾向性があったと思うのです。

だけれども、くりかえしになります。そのことによって甘くなったのは、収集や対話もふくめて、研究主体が認識を生産していくプロセスそのものの認識です。極端ないかたをしますと、社会調査は、対象として自存している現実を描写して分析していく過程ではなくて、主体が対象を媒介にして社会に対する認識を生産していくプロセスである。そのような調査そのものの認識論的な力をもっと強調したかたちで社会調査論の再編成が行われた方がよかったのではないかと、個人的には思っているのです。

具体的な資料の系列で考えてみると、調査結果だけではなくて、認識の生産プロセスの総体を多次元的におさえる必要がある。問題の設定、対象の設定、素材の選択、収集、整理一覧などの処理、さらには分類という解体と関連づけを経て、分析がたちあがる。報告書や論文だけには回収されないような、そういう多重のプロセスのそれぞれの段階において、さまざまな質を持つ資料・データが存在している。そうしたデータ空間のなかで自分の研究が進められていくという、その辺のことについて、「理論」に従属した調査論の中では語られなくなっていく。調査論が技法化していくとともに、語られなくなっていくという印象をつよく持っています。

だからこそ、このシンポジウムで問題になっているデータアーカイブを、私としてはむし

ろこのような認識の生産のプロセス総体の自覚化において役に立つ蓄積として、積極的に位置づけていきたいと思うわけです。その意味では確かに教育にも有用でしょう。社会の把握のしかたそれ自体を検討するために、これらのデータアーカイブは役に立つからです。

## エフェメラルの書誌学

そうであるならば、蓄積をどう構築するのか、どう調査の全プロセスのなかに位置づけて読むのかが、改めてキーポイントになります。図書館テクノロジーの限界にも触れましたが、要するに近代図書館学はかなり文字テキスト中心主義的で、刊本を中心にすえた書物主義だったと思うのです。英語ではエフェメラルというと、パンフレットとかビラとかカードとか、書物以外の「刷り物」を指します。陽炎みたいにその場限りで消えていってしまう印刷物という意味だろうと思うのですが、それらを蓄積管理する方法は、先ほど申しましたように開発していない。管理技術を開発していないだけでなく、書誌学のような基本知識すら未発達な場合が多い。

一例で、私たちがつくった画像テキストデータベースが対象としている「新聞錦絵」をとりあげてみます。素材は社会情報研究所が所蔵している小野秀雄旧蔵のコレクションで、かわら版と新聞錦絵が多く含まれている。その画像とテキストをデータベースにする作業を2年ほど前にやりました。東京大学総合博物館で展覧会をやるのに合わせて、データの整理を進め、社会情報研究所の50周年記念事業の一つとしてCD-ROMで試作版を作った。市販版は、ボイジャーという電子出版の会社がつくり、トランスアート(TEL03-3257-4291)から4,000円で発売されています。

もともとの資料は社会情報研究所の図書館にあるのですが、図書館はたいへんに簡単な所蔵目録をつくって管理しただけで、利用者に向けての公開にもなかなか手がつけ



られなかった。所蔵目録が普遍性を構成しえなかったことも、あるいは公開の遅れに関連しているかもしれません。なぜ正確な目録ができないのかというと、別に怠けていたわけではないのです。新聞錦絵やかから版は一枚刷の紙切れでありますので、書誌的な扱いが難しい。たとえば一例をあげますと、書物でいうタイトルをどのように、何をとるかという、普通の刊本であれば疑問とされることがないような自明のことが簡単には決められない。

たとえば資料1を見てください。天使が抱えている題名欄とおぼしきところに「東京日々新聞」とあって、その左端に「第一号」と書いてあります。「壹」は「一」の旧字です。東京日々新聞第1号に載った信濃の殺人事件を、言うならばビジュアル化して、錦絵という木版多色刷りにして、絵草紙屋が売り出したものです。文字も木版で画面に彫り込まれている。新聞や雑誌からの類推からですと、



資料1 新聞錦絵

これら全体の題名を新聞や雑誌のように「東京日々新聞」として、その第1号、創刊号としてしまいたくなる。しかし、これはもしタイトルを設定するならば、「東京日々新聞第一号」までを通して一つの題名と考えなければならぬ。

第1に、「第一号」は創刊の初号を意味しないからです。そして「第二号」へと番号順に続いたものではない。むしろこれは東京日々新聞の「第一号」に載った記事を題材に錦絵にした、そのいわばカラー版の絵ときの元記事が載った新聞の号数を指ししめしているだけです。番号はまったく飛び飛びなのです。

第2に、同じ号数で内容の違うものがあることは、さらに処理を複雑にします。元記事の号数という原則からすれば当然で、錦絵に描いてみせた話題が同じ日の同じ号の新聞から採られていけば、同じ「東京日々新聞八五六号」という題名になって、まったく不思議ではない。ただし、図書館の目録レベルでの管理を考えると、同じ題名を持ちながら存在としてはまったく違うものが複数あるということは、たいへんやりにくい。しかし、どう区別するか。われわれが論文で他の人の著書などを引用しようとする時にも、同じ著者の同じ年に発行されている著書論文だと間違いやすいので、引用の略記のために、たとえば[佐藤健二, 1992a] [佐藤健二, 1992b]と書き分ける。それに似た工夫が必要になる。しかしこのアルファベットで分けるというのは、論文の引用文献リストの範囲内での指示形式としては便利でも、じつは何を規準に a, b と符号を付けたのか、その原理は場あたりのでしか一義的ではないので、複数のリストにまたがるような普遍性は構築できない。その点で、そもそも全体が見えていない段階の新聞錦絵の整理には使えないのです。

だから、仮の形式ではあるけれども、題名のあとに文章の最初の文字を入れて区分する

方法を採用した。これであれば、題名レベルだけでもあるていど同一性や差異の認定が可能だからです。同じ号からの複数発行のケースはそれほど多くないので、最初の文字をだいたい1字か2字を取れば99パーセントぐらいに識別率が上がる。データベースとしては、意味ある語の区切りまで採っていますけれども。

恐ろしく細かい話になってしまいましたが、言いたかったのは、つまり題名リスト一つをとっても、資料そのものの構造の認識なしには立ち上がらないという基本的な事実です。資料そのものがどういうかたちで発行されたのか、そこを知識に入り込まないと、実は整理のしかたそのものが見えない。

この新聞錦絵の発行年月は基本的に、近代の出版法整備以前ですから、刊記と呼ばれる発行年月日や出版社（出版人）表記などが無い。発行された日の記録が義務づけられていないので、わからないのです。今日の広告やポスターに発行の日付がないのと同じです。ただし、版面から一部のものについては推定することができる。近世の出版統制制度のもとでの業界の自主的な検閲である「改印」があれば、その許可の年月表示からだいたいの発行年月が推定できる。ポスターなどもたとえば掲示のための印の日付がある場合は、後世において街頭に貼られた年月を証言するかもしれません。

ちょっと寄り道が長くなってしまいましたが、申し上げたかったのは、法や制度や習俗やさまざまなものが関わって、はじめて資料がいつ刊行されたものなのか、その資料相互の特質を弁別するために何を標識としてとるかということを決めることができるわけです。その意味では、資料そのものが社会的な存在です。その規定力は収集と整理とを進めて、はじめて見えてくるという部分も大きい。

では我々が調査票を作品として著作物というふう考えた場合に、どんな情報をリスト

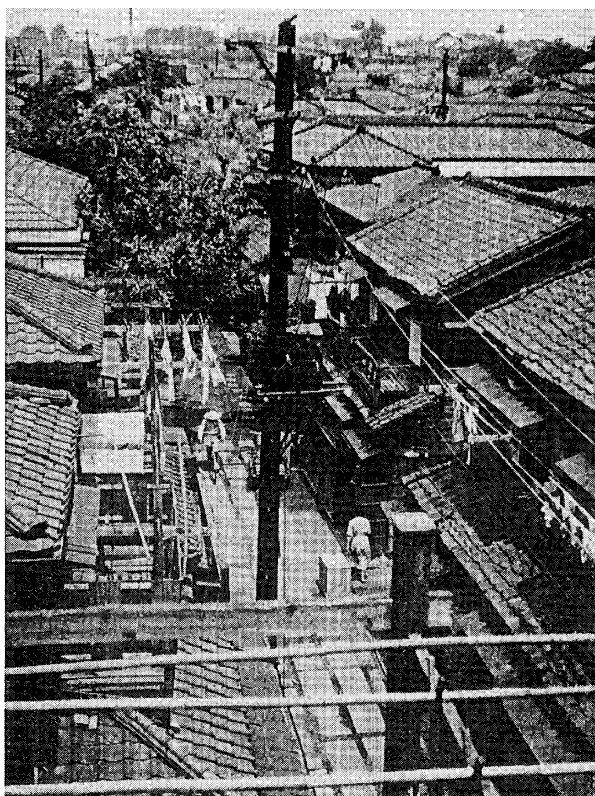
化のための指標として採っていったらいいか。書物という発行年月にあたるものはなにか。もちろん調査された日や期間が意味を持つてくるのはいうまでもありませんが、刷られた日も意味がないわけではない。何を重視してみんなと共有していくかという論点が、まさに収集し整理をしながらでない議論になりにくい。資料学が一見成立してよさそうな部分でなかなか成立していないのです。そしてデータベースの1つの意味は、そういう資料学的な整理を発展させ、資料そのものの特質にせまる手段の有力な一つになるのではないかと。新聞錦絵のような、これまで総体としては分析対象にされたことのないものの整理は、そうした論点を教えてくれたような気がします。

### 『都市の日本人』

大きな3番目の括りに入って、ドーア先生の『都市の日本人』のもととなった「下山町調査」を素材に、社会調査という実践の総体をとらえる蓄積の生かしかたについて、踏み込んで考えてみたいと思います。いくつかの段階で調査の成果を抑えることができます。調査方法の複合的な可能性を物語る切り口は、じつは最終的に刊行された書物のあいだにすら観察することができる。

たとえば、ドーア先生の『City Life in Japan』という英文の初版と、岩波書店から訳された『都市の日本人』とでは、いくつかの点でテキストにズレがあります。

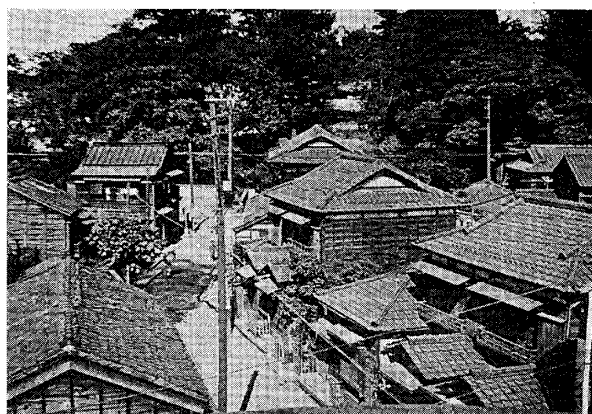
まず、日本語版では写真がすべて省かれました。英語版では資料2に挙げたような写真がアート紙に印刷されて四カ所8ページ分本文に挟まれているのですけれども、これがカットされた。おそらくは、調査地住人のプライバシーを日本語での出版であればこそ重く考え、あえて省いたのだと思います。「下山町」という調査地名も、ドーアさんが下町と山の手の中間的な性格というところから付けた仮称であって、上野の花園町であったというこ



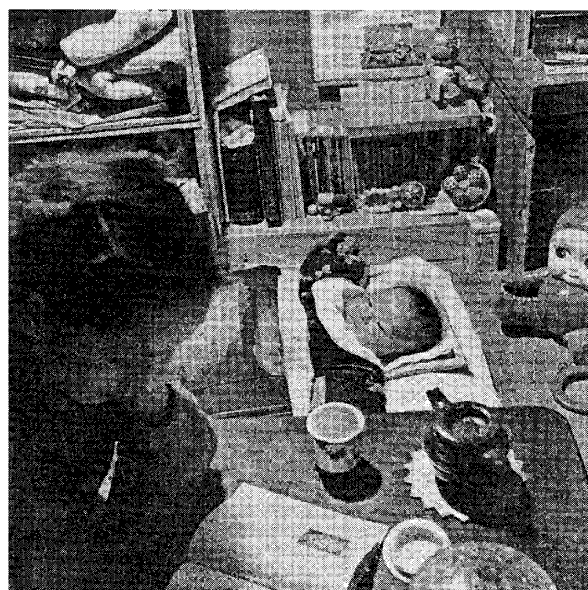
Street in Shitaya-cho



Meeting of a primary School Pupils' Self-governing Committee



Street in Shitaya-cho



Living in one room



The street story-teller shows his pictures



A poor family. The husband in sick and the family is largely supported by the wife's earnings making match-boxes at home

とは伏せられています。そして日本語版の函にのみ写真が印刷されていますが、だいぶ違うところの町のイメージのように私には感じられます。しかしながら別な場所なのかどうかも確認できていないので、踏み込んだ判断はひかえましょう。

ドーアさん自身の撮影したものではないらしい岩波フィルムの提供のものもあってむずかしいのですが、明らかにこの地域調査の収集データの一部に、写真による記録があったことは記憶しておくべきだと思うのです。そして私の手元にあるドーア先生の関連資料のなかには、「下山町」の写真集は含まれていませんでしたけれども、あったことはドーア先生の記憶からしても間違いない。これもまた、調査が生産したテキストの一部であり、調査プロセスの総体を押さえようとするデータライブラリーの発想のなかに入れていいものではないかと考えます。

これ以外にも、ドーアさんの『都市の日本人』調査関係の資料のなかには、データライブラリーとして押さえるべき資料が、数多く含まれています。調査実践の全体にわたっているのですが、じっさいに資料の形にそって説明してみたいと思います。

## 「L.S.」と「K.S.」

まず第1に、すでに触れた作品としての調査票です。ドーアさんは、1951年の3月から9月にかけて様々な調査を行っています。リンド夫妻のミドルタウンをかなり意識されたものだとおっしゃっていましたが、8つくらいの調査が行われていますが、ある一つの調査票では地域全体の325世帯のうち、196世帯を調査した。拒否が3で、移転・不在などで実施できなかったのがわずかに25という、かなり徹底的な調査を行っている。使われた調査票は、選択した100名に対して行われたものも含めて、いくつかが残っています。資料3としてお配りしたものは、その一つで

して、表題に「K.S.」と書いてある。これは「家族生活」の略号です。他に「L.S.」というのがありますが、それは「リビングスタンダード」の略号だそうで、いささか原則がちがって、先生ご自身に聞かなかったらわからなかった。

この時代の普通の形式なのかどうかは、まだ確かめておりませんが、質問がリスト化されている質問票と、回答項目などがより詳しく載っている記入票とが分かれています。そしてじっさいには、この記入票も用紙として使用されたかどうかは疑わしい部分がある。回答が長くなって、レポート用紙にあらためて書きまとめられたと思われる形跡があるからです。

第2に、それらをもとにした中間的な整理とおぼしき、書き写しのリストも残っています。これもデータの集積として意味がある。中には学生が書いたレポート用紙そのままを切り抜いて貼ってあるものもあります。対象者の番号と、質問の番号を挙げて、それぞれの回答を書いています。たとえば、資料4はその具体例で、質問の46ですから、質問票の方を見ますと「恋愛結婚ですか見合結婚ですか」というようなことを聞いています。これに対して、個票番号6の人は「恋愛」と答え、21の人は「親類に決められた、主人が忙しくて」と言ったのでしょうか。どういう意味かは、これだけではよくわかりませんが。

第3に、かなり標準化された中間的な集計もひとつの資料であり、データライブラリーの蓄積の対象になりうるものです。部分的に紹介するだけになってしまっていますが、ドーアさんはコンピュータの便利が今日のように発達していない時代において、集計につながる一覧性の構築のために苦心をしているのです。ちょうど原先生のいわれたデータによる「行列」を作るために、資料5のようなものを作っている。一番下の台紙の上の部分には、変数となるべきものと値の範囲の一覧が

## K.S.

1. お宅の宗教は佛教ですか、a. である場合 お寺は何宗の何寺ですか、またどこにありますか、b. でない場合 そうするとお宅の宗教は何ですか。
2. お宅に佛壇がありますか。
3. 何代前からの御先祖が祭つてありますか。
4. お宅に系図のほか過去帳等、先祖の名前や年代が分かるような書類がありますか、  
5-10 別紙
11. (お宅の)仕まつりや年中行事の語ですが、お宅で次の行事を行いますか。
12. [昔、この家がやったか今やらない行事について] どうしてやらなくなったのですか。
13. お宅の色々なしきたりは奥さんの東風の風習に従いますが、それとも御主人の家風に従いますが、それとも近所のしきたりに従いますが。
14. お宅がこの町内へ入ったのはいつですか。
15. 御結婚なさってからこちらへ来るまで花園町の他にどこに住んだ事がありますか。
16. 御主人は〇〇家でお生まれになったのですが、16a. でない場合 そうするとお奥さんは〇〇家でお生まれになったのですか。
17. お宅は〇〇教の本家になつてありますか、それとも別に本家と認められる所がありますか。
- 本家でない場合 18. そうするとお宅の本家はどこですか  
19. いつ分れたのですか  
20. [現代分れた場合] 分れた時に本家の主人は誰でしたか(御主人のお父さんでしたか、お父さんでいいか)  
21. その本家のまた本家にあたる所がありますか  
22. [ある場合] そのまた本家とどういうつきあひをしておりますか
23. 分家と云いますが、元は角分家とは云えなくとも、お宅と同じ姓で同じ先祖を祭る家がありますか。
24. [B.C.](分家)が分れた時にお宅から何か援助を与えた事がありますか、分れて後はどうですか  
[援助一儀礼的でお宅は産けは別として生計の上でいくらか重要性を持つた物質的、金銭的援助]
25. [B.C.]逆に(分家)のお世話になつた事がありますか。
26. [A.B.]お宅が分家した時(本家)の方から何か援助を貰つた事がありますか、又分れた後
27. [A.B.]こちらから(本家)を援助した事がありますか。
28. こちらから奥さん(養子、婿)の実家から援助を貰つた事がありますか。
29. 逆に何かの事でお父さん(養子、婿)の実家から援助を貰つた事がありますか
30. [戸主の父が死んだ場合](御主人の)お父さんがなくなった時の御遺産の分け方はどちらの風になりましたか。
31. [本家A.B.] (お宅B.C.)の法事の時になす[こちらA.B.] (分家B.C.)から[行きますかA.B.] (来ますかB.C.)
32. その場合[お宅からA.B.] (分家からB.C.)誰か[行くか] (来るか)について何か決つたしきたりがありますか。
33. [お宅A.B.] (分家B.C.)の冠婚葬祭の時になす[本家] (お宅)から[来ますか] (行きますか)
34. その場合誰か[来るか] (行くか)について決つたしきたりがありますか。
35. [お宅A.B.] (分家B.C.)の冠婚葬祭の時に本家から来るのと何人か本格的なものでないという事になりますか。
36. [お宅A.B.] (分家B.C.)で結婚の語があつた時に最終的に決まる前に[本家之] (お宅之)相談に[行きましたか] (来ましたか)

-2-

- 37. [相談したと答える場合] その相談の程度ですが もし[本家A.B] (お宅B.C) が馬が目だと云ったら当然あきらめましたか。
- 38. 冠婚葬祭や御法事の他に[本家へ行く]<sup>A.B</sup> (分家から来る)<sup>B.C</sup> 等がありますか。
- 39. [本家が兄で他に主人の方の兄弟がある場合] (本家)と御主人の他の御兄弟とのつきあいの程度が違いますか。
- 40. 御主人の御兄弟と奥さんの御兄弟とのつきあいの程度が違いますか。
- 41. 奥さん(養子、婿)が時々実家へ帰る事がありますか。
- 42. 縁起の悪いお話しですが、もしお宅が焼けたらどこへ御やつかひになりますか。  
42a (本家A.B) [分家B.C]の方でどういふ不幸な事があつたらお宅で何かの形を助けてにり"る"でしょうか。
- 43. お宅のお墓はどこにありますか。
- 44. 誰がどういふ時にお参りしますか。
- 45. 御結婚なさってから何年になりましたか。
- 46. 小したちのつた話で失礼ですが、見合結婚でしたか、恋愛結婚でしたか。

**【恋愛】** 47. お互に意志を決めこから両方とも御両親に話しましたが、それと一方だけ親に話したかど"す"か、それとも誰にも相談しな"り"て"結婚"なさりましたか。[両親一或に一番近"り"親類]

48. 実際に話を付けたのは御両親同意"で"したか、それとも仲人さん"で"したか。

**【見合】** 49. 始めてあつたのはお見合の時"で"すか、それとも前から知り合"つ"ていたか。

50. どちらの方から話が出ましたか。

51. 御主人<sup>A</sup> / 奥さん<sup>B</sup>の御両親が突然「誰か適当な人"を"」と仲人さんに頼んだ"ら"うけ"て"すか、それとも御主人<sup>A</sup> / 奥さん<sup>B</sup>の事を先"ろ"つ"て"「その人"を"」と頼んだ"ら"うけ"て"すか。

52. 御主人<sup>A</sup> / 奥さん<sup>B</sup>の御両親がその話を持出したのは御主人<sup>A</sup> / 奥さん<sup>B</sup>に頼まれて"や"つた"の"で"すか、それとも御両親が"その"意志"で"すか。

53. 実際に話を付けたのは御両親同意"で"したか、それともお仲人さん"で"したか。

54. お見合の時から御結婚なさるまで(は何"月"で、どうい"う"つきあ"ひ"を"しましたか)。

- 55. 御結婚式の媒始人は実際にお仲人を"や"つた"方"で"すか、それとも形式的に頼んだ"ら"うけ"て"すか。
- 56. どうい"う"縁"由"であつてその方を頼む事になった"の"で"すか [その方"を"式"的"媒始人]
- 57. その仲人さんはまた遺"産"か [その仲人 = 実際のお仲人、形式的媒始人、両方、以下全部同じ]
- 58. い"ま"に"お"つきあ"ひ"を"つ"けて"あり"ます"か"。
- 59. 決"つ"た"時"に"訪"門"な"さ"る"の"で"す"か、それとも決"つ"て"い"ら"せ"ん"か"。
- 60. 御結婚なさってから、何"か"の"事"で"その"方"の"お"世"話"に"な"つ"た"事"が"あ"り"ます"か [あれば]と"う"い"う"事"で"す"か。
- 61. これ"か"ら"お"宅"で"何"か"あ"つ"た"上"の場合、その"方"の"後"助"を"頼"む"事"を"考"へ"ます"か"。
- 62. [考"え"る"と"答"え"る"場"合] どうい"う"事"を"つ"た"ら"頼"ま"す"か"。
- 63. 逆"に"こ"ち"ら"が"仲"人"さん"の"方"を"後"助"を"手"立"に"な"す"事"が"あ"り"ました"か、または"別"家"に"あ"り"ます"の"で"す"か"。
- 64. 今"年"お"宅"で"年"賀"状"を"何"枚"出"し"ました"か"。
- 65. 御夫婦"で"出"す"の"と"御"主"人"が"出"す"の"と"奥"さん"が"出"す"の"と"枚"数"は"夫"々"ど"れ"位"に"な"り"ま"す"か"。
- 66. お正月の訪門はど"う"い"う"所"へ"行"き"ま"す"か。 [名刺作"り"置"り"て"来る"所、改"つ"て"行"か"な"け"れ"ば"な"ら"な"い"所、先"か"向"い"て"行"く"所"の"区"別]

-3-

67. 近所の冠婚葬祭の時に出す番巻やお祝の類をどういう事によって決めるのですか。
68. 何うに軒両隣と云いますが、どういう近所とは、よそと違った特別なつきあひがありますか。
69. 隣り隣組の人数とはよそと違った特別なつきあひがありますか。
70. 月に何回位お客様に御飯を出しますが、その内ど何人位が御主人の友達で何人位が奥さんの友達ですか。
71. お宅の冠婚葬祭の時に近所の人を呼びますが、一何軒位ですか。
72. お宅の冠婚葬祭の時に近所の人から手伝いに来ますが、一何軒位。
73. [お宅の義姉等のある家] 次の仕事を誰か主にやりますが、一炊事、掃除、子育て、おとんの上げ下り、洗濯。
74. 御主人は次の事で手伝う事がありますか。一炊事、掃除、子育て、おとんの上げ下り、洗濯。
75. お宅で次の事を誰か決めるのですか。一お風呂をたくか、お葬式の時、いくら番巻を出すか、御飯のおかずを何にするか。
76. [Eの家] 母両親がおなくなりになったら本家の墓はどうなりますか、誰がどこに住みますか。
77. お宅でお風呂の順序が決っていますか。
78. お宅の財産の中で「ハッキリと奥さんの財産となっているもの」がありますか〔名義上或は夫係の金儲け上〕

## 資料3 調査票「K.S.」(その3)

載っている。下の方ははぐれる形になっていて、それぞれの行が一つひとつの調査票に対応している。

これは電子データではありませんが、コンピュータのなかのデータ構造と基本的に同じ形式であります。たぶん、これを媒体にして、ドーアさんは集計を立ち上げたのだと思う。その集計には数え違いなどもあるかもしれません。しかし、このデータ行列をもとに、われわれは現在のコンピュータで再処理・再集計することができる。その意味で、原調査票の形で残っているのではないけれども、それに近い記録が中間的なプロセスに残されている。そうした資料の可能性を、データライブラリーの思想は、切りすてるべきでないと私は思う。

いうならば調査のプロセスを逆に辿りながら、その中でどういうデータ生産の作業が行われたのか。これ自身がモノグラフィックな研究になる。そういうかたちで、ある密度での資料の塊があれば、50年前の調査その

ものを1つのデータの生産、さらにはそこでの社会の認識のプロセスとして、とらえ直していくことができる。このような展開をも二次分析という議論のなかの1つの選択肢として、入れておきたいと私は思っております。

## 質問紙以外

第4に、データの形態として注目しておきたいのは、学生が書いたレポートの断片です。これは、ある意味でいうと、調査員という主体のテキストとして、コミュニケーションとしての調査の一側面を物語るものでもある。そこには質問紙においては質問になっていないような観察が記されていて、たぶんドーア先生はその部分も面白いと思って、分析に生かしていったと思うのですね。たしかに、調査員が感じたことなんか書かれてあっても、雑音でしかないという立場もあります。しかし、クエッションネア・サーベイの下部構造ともいえるべきは、こうした調査員による対話であり、その反応採集であることを考えると、





K.S 46

Should we do a number between  
care of human rights by laste self?  
paid and is any of us sold ably?  
Pupulation of absolutely free  
various way of self

	6	まあ戀愛でしよう 間接的
	21	親類に決められた。主人が"忙くて"
Rel	32	妻の友達の家へ、主人も束合せて来た
Inn	43	夫が軍隊に居た時、妻の慰問文が"どき"それから交際が始った
Res	44	本所のミルクホールで"妻が働いてゐたか、其所へ、夫が遊びに来て知り合つた
Res	57	赤坂のホールで、妻が"つめてゐた時"主人が客として来た
	72	但し親だけで決めた
N O	79	妻の家が工場協会の事務所であつたので、夫が"其所へ度々来た関係で"
W O	80	職場
W O	93	〃
N O	100	同一アパート内
W O	102	職場
Dem O	107	衆泉寺の青年會(宗教團體)で知り合つた
N O	110	家が近いので自然と知り合ひになつた
	119	姉の夫だつたので"何れとも云へない"
	140	どつちか"どし"云ふのでなく
N	163	主人の先妻の子を、今の奥さんがよく面倒を見てやつた。(家が近くだつたので) "そこで"主人が、此の人を、子供のお母さんにしてやつたらよいと考へて、結婚の意志を決めた
Res	166	妻の兄が八形町で支那料理屋を以て居り、妻は其所にゐた、主人の兄も神田で支那料理屋を開いて居り、主人も其所に寄留してゐたから、同業のよしみで知り合つた
Gen	167	現在の妻は先妻の妹で、姉の死後、すぐ話がまとつた
N	169	生家が近いか、毎日會つてゐた
Res	174	私が料理屋で働いてゐたら、主人が客として来、知り合つた
N	201	妻と家が近かつたから
Rel	214	京城で、夫が兄の友人だつたので
	229	見合といふ儀式はやらなかつた
	239	見合はしなかつたけれど、"戀愛結婚"ではない
	256	父の務先の主人の娘
	282	お互に知つてゐたから、見合はない
	287	見合結婚では全然ない。戀愛結婚か。きつた時"戀愛"ではないが、こゝろを商賣をやつてゐるから、別に結婚といふ程ではないが、一緒に生活してゐるだけだ、としが答へない、これ以上、細かく質問する事は相手の感情を害すると思ひ中止した、勿論、仲人も居なく、親にも話して居ないで結婚したのでは、ないかと思はれる、それは"一昨年度、親に世話になつてゐたのが、親と少し、"た"た"があつたので、今は一人でやつてゐる、"と云つた事から推察して、此の"た"と云つたのが、此の結婚の事ではないかと思ふ
N	310	知り合ひ(すぐ近所)
	311	(はつきり見合とりつるか、どうかね)
W	312	勤務先が同じだった
	333	主人の店と、奥さんの勤務先が近く、顔矢張りあつた、電車の中で話しかけたのが始まり





266

- 職業のある人として恐らくドブ底の生活ではないかと思はれた。主人は臆怖で多少酩酊しており、その為か、割合その窮情をかくすずに話してくれた。
- この調査の主題以外の事(自己の経歴、人生観等)について長広舌二時間半、今迄で一番長い調査時間である。
- 先づ家に入ると電気がなくローソクの灯で照明してゐる。これは電気がはらえないので電気の供給を差止められたのださうである。その薄暗い中で子供が三人、座布団を敷き並べた上に、昼間の着物のまゝあちこちにこゝろが寝てゐた。
- 主婦は、相当な家庭の出身だつたのださうで、人前で物を乞ふ事が出ず、家庭の主婦として無能力者だと主人が去つてゐた。彼の口をかりれば「よそのヤジが又カミソをつけて持つて来てもそれをくまらすようなバカヤロウだ」と云う事になる。猶主人の主婦に対する呼称は「オッカア」である。そのためこの調査では主婦から解答して貰はねばならぬのであるが主婦自身答へたのは(26)——買物の店(39)——洗濯——の二つ丈であり、他はどうしても答へて呉れなかつた。之に対し主人が代つて能辨と振つたのである。主人は台東区の職安自由労働者の組合の監査をとめてゐた。
- 主人は小學校6年の時家が倒産して、東京の呉服商に裁縫職人の見習ひとしてデッケにやられ十数年後は、自立職人として自立し最高53人の人を使った事があった。その頃結婚し、戦災にあつて家を焼かれ、郷里の山形県、弟の居る白河(福島県)東京等転々し、職安の自由労働者(日收242円)になつた。所が今年一月一寸した足の傷から悪性のバイキンが入つて、膝の上から切斷せねばならぬかも知れぬ様な事になつたが、切斷丈は免れ未だに足が不自由である。所がその様にして<sup>高</sup>職安一ヶ月以上になつたので職安の登録が切れて失職した。~~原因~~。そこで友人十数人が集り、肩買ひの職と始めた。それが五月の半ばは自である。今月(6月)の十六日から再登録が出来再び職安に復帰出来るとの事。
- 主人は、約10年位前迄は、バプテストを身近から離れた事のない熱心なクリスチャンであつた。かつては牧師にならなかつたかと思はれた事もあるとの事である。信仰の契では、現在で~~何~~何人にも負けはしないと自負してゐる。ローソクの光でよくは解らなかつたが、マリアと覺は石コウの丸い浮周りが柱にかけあつた様である。然し、彼の語から察するに、彼は、キリスト教の精神よりも、師匠、徒弟かたぎ、或は、

266

## 資料6 レポート断片

告書の認識とどういふふうな誤差をもっているのかを考えられるデータになりうる。

第6に、組織的な収集データだけではなく、調査にまつわる文書もまた、ライブラリーで参照され共有されていいものである。もちろん、これはたいへんな拡大なのですけれども、その意義についても問題提起しておきたいのです。資料7などはその意味で面白い資料です。

これは「御照会」という題名の文書ですが、調査に入る前の段階で、ドーアさんの紹介を町内会長がやっている。そしてドーアさんご自身が、私はこういう問題関心を持ってお国に勉強に来たということを書いている。あいさつ文にまで意味を読もうとするのは、先ほどの原先生が受けられた批判と同じように言えば、それは君の趣味ではないかという話に

## 「御照會」

上野花園町十八番地西谷氏方に現在居住しておられるR.P.ドーア氏を御紹介致します。同氏はロンドン大学出身の研究者でありまして、昨年三月に来朝され、只今は東京大学文学部社会科学科研究室に籍を置き、我が國の社会生活の研究に従事しておりますが、本年九月帰國の暁はロンドン大学で日本社会学専任講師として日本の社会学一般の講座を担当教授される事になっております。過般当町会有志としての吾々に此の花園町の社会調査について御依頼がありましたので出承るだけ御趣旨にそつよう協力したいと思ひまして、ドーア氏の御要望を皆さんにおつたえ致します。尚ほ、当日の出席者は緒方實雄、片山岩藏、水村己之助、小柴三郎、柴田弘、長島芳藏、舟橋安治、松山政市、村上律藏、以上九人ぐあります。ドーア氏の御要望は次の通てあります。

「この度は私は皆様方の御協力により、自分のお世話になっております花園町の調査をさせて頂きたいと思ひ立ちました。それは御町内の皆さまの生活一般につきましまして色々の資料を集め、これを一冊の本にまとめた。上野花園町の生活とても題して出版し、東京の代表的な町として当町のありのままの姿を英國の人々に紹介する目的からなのであります。調査の内容は現在の皆様方の生活状態、職業、政治、教育、娯楽、又は結婚や家庭生活の実情とこれに対する皆様方のお考や御希望など、要するに花園町の生活様式と民情の全般に及んであります。その方法としましては私自身出来るだけ皆様と親しくおつきあひする機会を得て、色々とお話をおうかがいすると共に、東京大学の学生さん方にも協力して頂いて戸別に皆様のお宅に参上し細かい点について確かな事情を調べて頂きたいと希望しております。なぜ私がこの様な事を考えたかと申しますと、現在日本の一般市民の日常生活の有様が余りにも外國の人々に知られていないのを非常に残念な事だと常に感じていたからであります。お忙しい中をお邪魔して相当地に御迷惑をおかけする事と恐縮に存じますが皆様の親しい御協力を得まして、限られた日数を有効に勉強させて頂きましたら、その上この町の姿を広く海外に御紹介する事が出来たら、お國に勉強に来た甲斐もあつて私として最も喜ばしく思う次第であります。 R・P・ドーア」

右様の御趣旨でありますから、いづれ後程何分の御連絡がある事と存じますが、その節には出来るだけ御協力下さいますよう御照會と共に私からも何卒よろしくお願ひ致します。

昭和廿六年四月十七日

花園會々員殿

花園會々長 柴田弘

## 資料7 御照會

なるのかもしれないけれども、やはり集められるデータとつながっているその前提を無視できない。ましてやドーアさんのこの資料のように、ご自身で調査以前の問題意識を表明しているような場合は、それ自体がひとつの歴史資料になるでしょう。

調査開始以前、調査員がかかわる収集段階、データ処理としての書き抜き、一覧表づくりの中間的な集計段階、そして採集的な報告論文に載せられている写真の位相などなど、調査という実践のプロセスのさまざまな段階で残されたものについて触れてきました。じつに多くの段階において、データライブラリーが保存し蓄積してよい資料が生産されています。そしてこのプロセスが、同時にまた、たとえばドーアさんという研究者の「下山町」という社会の認識を生産するプロセスでもあったことは重要です。それを考えるとき、データライブラリーはその生産を総体として浮かびあがらせる用意にむかって拡大していくべ

きではないかと思うのです。その点で単純なる二次利用という、できあがったデータだけを再利用する再集計するという意味ではない、本源的な二次分析の意義を高く掲げる必要があると思うのです。二次分析の多様性に向けてと申しあげたのは、そのあたりの論点であります。

## データの多次元性と読者の批判力

もう時間が迫って参りましたので、最後のまとめの方にいきたいと思います。

第一に問題として提起しておきたい論点は、データの多次元性と読者の批判力との関係です。

いささか直接的な一例ですが、たとえば、この家族生活の調査票のようなものを、たとえテキストとして電子化されて文書の形式で文字化されていたとしても、私は画像のデータとしても同時に保存し公開しておいた方がよいと考えています。さきほど新聞錦絵の画

像テキストデータベースをお見せしましたが、あれは画像のなかの記事テキストを完全に翻刻している、つまり文字列として自由な検索の対象になる。そのために、歴史学専攻の大学院生などに手伝ってもらって、あの読みにくい木版の文字をテキストデータに直しています。ずいぶんチェックいたしましたけれども、しかしながら、間違いは最後まで残りました。しかも間違いともいえないような解釈の違いもかなりあるわけです。そうした場合に、画像としても同じデータベースのなかにあるということは、テキストの翻刻に疑問をもった場合に画像にまで遡って検討することができるという点で、意義が大きい。翻刻が間違っていることの批判以上に、間違いがそのデータベースのなかで指摘できる構造をつくっていることこそ評価されるべきだと考えています。読者の批判力はまさにそうした仕掛けのなかで生産される。読者は翻刻の間違いを確かめたうえで、利用していくことができる。画像とテキストという多次元性を持っていることと、それを利用する人の批判力とは、相互規定的なのです。画像データと翻刻テキストデータが両方あるということは、決して同じものが2つあるわけではなく、いわば処理段階の違う資料があるわけで、同じデータベースの中で参照できることの意味は、たいへん積極的なのです。

### ぶ厚い共有にむけて

じつはこれは、印刷革命が学問に何をもたらしたかと同じでした。印刷革命が生み出した複製による公開という効果は、学問に、いわばデータの共有にもとづいた批判力をつけくわえたのです。極端ないいかたをしますと、まったくデータライブラリーには間違いがあってもいいので、その誤りを発見し指摘しうる多次元性と公開性とがありさえすれば、じつはしだいにより良い、より正確なものになっていく可能性がある。

その意味で言いますと、データの多段階的な、あるいは多次元的な形態を設定した上で、それぞれの資料の固有性が一定程度共有されているような、そういうデータアーカイブの設計もあり得るのではないかと。こうした場合の積極的な意味は、さっき言いましたような形で、利用者や読者が間違いに気づいてフィールドバックし得る。博樹さんの考え方ともよく似ていると思うのですけれども、そういうより正確なアーカイブになっていく運動の一環として、公開ということはあるだろうと。それと同時に、読者や利用者たちが間違いに気づいて、自分で修正した上で使えるとか、解釈の違いや処理方法の違いに対しても位置づけなおして使えるなどの意義も忘れてはならない。一言でいえば厚みがある、そういうデータライブラリーをつくれるのではないか。

「厚みのある」という議論は、フィールドワークの理論の中でしばしば使われます。thin description に対する thick description ですね。しかしそれは単純にフィールドワークの結果だけではなくて、ここで言うデータライブラリーの構造にも応用できる概念ではないか。逆に言えば、フィールドワークも、データアーカイブの利用も、社会に対する認識の生産というプロセスでは同一なのでありまして、だからそこで応用できるということは、そんなに不思議なことではないと私は思うのです。

### 非文字資料の資源化

もう1つの問題提起として、写真や錦絵のような視覚的な資料、すなわち非テキスト型の資料におけるデータライブラリーの基本的な意義と問題点に触れておきたいと思います。

一面において写真は、たとえば「下山町」の当時の生活状況について、文字以上に雄弁に記録している。もしこちらに相応の読解力があれば、文字テキストだけでは語れないありさまについて、ぶ厚く記録することができ

る。しかし写真をはじめとする視覚資料には、記録の共有や批判の点で難しい問題がいろいろあります。たとえば写真そのものはほとんどの場合、それが撮られた日付や、複製された時期のデータを残しません。ある時期以降のカメラのなかには日付が映り込むものもありますから、家庭用の写真にはそれらを手がかりに論じうる余地がでてきましたが、まだまだそれを組織的に扱う写真の書誌学は成り立っていない。

私としては乱暴な見通しですが、けっきょく画像アーカイブが一定程度進むのと並行してでなければ、書誌学的基本知識の共有ははかばかしく進まないのではないかと思っております。その意味では、蓄積を共通して公開していく方が先行してしまっているのではないかとすら思う。

比較してみないと、批判そのものが生まれないという問題について、直接的な社会調査関係の資料ではありませんが、絵はがきを例にあげておきます。絵はがきといっても、私が論じたのは事件を取り扱った写真絵はがき、いわばニュース絵はがきともいべきものなのですけれども、この印刷された写真は資料論的にむずかしい問題をいくつも提起してくれている。

まず基本的には一枚刷りの資料として、多くの場合、近代の出版法の統制の外にあるため刊記がない。しかしながら、郵便制度とかかわるという特質ゆえに、消印すなわちスタンプのかかわる範囲では、使用の日付はあるていど確定できる。さらには日本の絵はがき文化は日露戦争記念絵はがきに始まっているため、記念の文化と結びついているので、あるていどそこから推定できる部分もある。しかしながら、日付印はないものが多い。使われたはがきよりも、使う目的もなくコレクションされたものが多いからでして、そうなる一つひとつの資料から刊行年月を知るのはなかなか難しく、あるていど集積していかない

とわからない領域が大きくなります。逆にいえば、コレクションを横につなげる巨大な集積でもできた場合には、日付を有するものにも行き着く可能性が大きくなるだろう。その集積をつくるためには、さきほど申し上げたような資料一つひとつの同定を行いうる、題名や主題や印刷方法や形式などの書誌項目の確定が必要になってきます。

### 画像資料批判

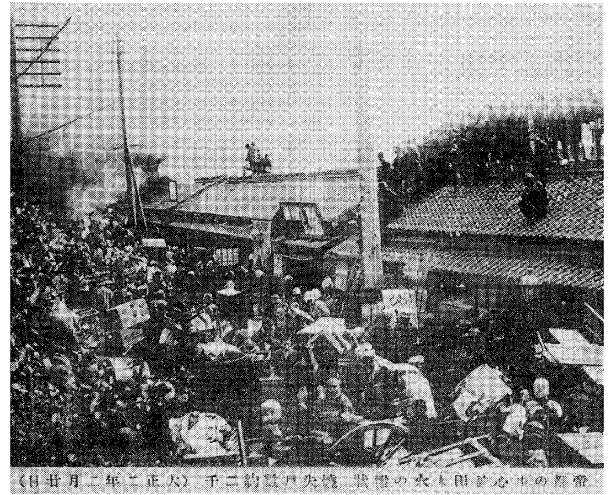
しかし、こうした記録の資料学的な登録があるていど組織だってなお、資料批判というものは終わらない側面がある。たとえば、資料8の二つの絵はがきを見てください。一つは、明治44年の神田の大火とあります。屋根の上に人が昇っていて、避難民なのか野次馬なのかはわかりませんが、事件の光景が写しだされています。ところが、別の絵はがきにまったく同じ写真が使われて、活字のキャプションの方はというと大正2年の吉原の大火ということになっている。活字になっていると、なんだか信用してしまいがちですが、さてどちらを信用したらよいのか、ア prioriに年号の早い方が正しいとはいえません。画面の荒れやレタッチなどの複写にともなう問題や改竄のあとをたんねんに探っていく必要もあるかもしれません。しかしながら基本的には、写し出されている風景の方から考証していくのが基本的であって、内在的な資料批判ということになるでしょう。

写真の資料批判論は、いつを確定するために、その当時に画面に写されている対象があったのかどうかを探らなければなりません。この風景はどこからどういうふうに写したもののなのか、地図を媒介にして探る必要もでてくるでしょう。私が強調しておきたいのは、データの確かさというものは、別なデータの集合としての1つの知識の蓄積の中でしか測定することができないということでもあります。

ですから、もういちど社会調査データベー



状態の滅全通洞及廓遊原吉（火大日九月四年四十四裕明）



（日廿月二年一正天）千二約對戸先機 状態の火大則計心中の異常

#### 資料8 画像流用の絵はがき

スを含むデータライブラリーの問題にもどりますと、いくつかのデータベースの組み合わせの中で初めて批判力といったものが出てくる。そのあたりは、多次元性といったことの内実にかかわる問題だと思います。社会学の中でも1つの次元での調査のデータ化だけではなく、また1つの調査票だけではなく、いくつかのデータベースを発展させていく中でしかその批判力を育てていくことはできないだろう。とりわけ画像資料のようにまだ扱いが安定していない資料の中では、とりわけ収集と保存の果たす役割は大きい。資料の書誌学もけっきょくのところは、そうした横断する利用のなかからしか立ち上がらないだろう。その意味において、『都市の日本人』を例に申しましたような、調査資料のグラフィックな作品研究みたいなものが、補助線としていろいろと示唆しているものが大きいのではないかと考えています。

すいません、ちょっと長くなってしまいました。そんなところで。

**司会（高橋）：**ありがとうございました。最初の質問紙の話から始まりまして、社会調査のプロセスそのものに対する書誌学的な観点からの新鮮な観点を含んだお話がありました。皆さんの方からご意見、コメント等を伺いた

いと思います。

**中澤：**非常に多次元的な資料を補助線として引くことで、初めて社会調査に対するリテラシーと言うのですか、そういうものが育つというお話だったと思うのです。その趣旨は大変よくわかったのですが、その一方で、もしそういうことで、1つひとつの古い調査についてリテラシーを充分確保しながら研究していくということになりますと、研究する側も蓄積する側も、ものすごい人的資源と時間と経費が必要で、そこら辺はどういう基準で調査を取り上げてやっていけばいいのかということが問題になってくると思うのです。とりあえず、目の前にある地下室に眠っている古い調査を取り上げて、それを学的にリテラシーを高めるようなやり方で復元し続けるしかないのでしょうか。

何か、この調査を重点的にやるべきだとか、あるいは調査全体の見取り図をつくるとか、そういう戦略みたいなことが必要ないかという気がするのですけれども。

**佐藤健二：**その通りで、まずは資料のあるところからしかできないと思います。

労働調査研究会は労働調査研究会で、労働調査の展開を手元にある調査票ベースでまず一覧にするようなリストをつくり、解読を進めていった。農村調査ではまた別なかたちで

一覧をつくっていった。そういう努力がまず必要で、そうした調査史的な概略図なしに戦略も立てられないと思います。

いま私の手元に断片的ながらありますのは、ドーア先生の『都市の日本人』や中野卓先生の『鋳物の町』調査の一部分です。それらをア priori に貴重だといってしまうことはできない。むしろその意味は開かれています。残っているものはすべて網羅しなければならないとは必ずしも思いません。しかし調査史というコンテクストからみると、いずれも戦後の方法論展開期の徹底した実証研究調査として、さらには質問紙調査とランダムサンプリング全盛時代以前の試みとして、一定以上の意味があると思うのです。ですから、まったく分析を始める前の最初から、意義づけのでっちあげに苦労する必要はありませんが、調査史的な意義を押さえておくことは大切だろうと思うのです。

もう1つは、やっぱり残っている資料が、断片としてであれおもしろいかどうかですね。おもしろそうで、これはちょっと何か違うものが出てきそうだなとか、質問項目それ自体が興味深いとか。じっさいドーア先生が作った調査票は、良くやったなというぐらい質問項目が多くて多様なのです。それ自身が、やっぱりドーアさんが1950年代に来て日本社会を見た、その切片を雄弁にもの語っているというふうに思いました。だからそれはそれで1つの資料になり得ると。実際の記述そのものから、調査員という存在が浮かびあがる点も、私には興味深かった。けっこう私生活にかかわる変なことを聞いていたりするのだけれども、いろいろな人たちのレポートには、調査員としての発見が込められていて、それはそれで個票を復元してみても意味があるかと思っただ理由の一つです。

ただし、労力との関係も無視するつもりはありません。やりはじめても、途中で挫折するかもしれません。そういうことも含めて、

面白くできるかどうかという、その辺の判断も重要だと思います。

なんでも古い調査であれば貴重だとは思いません。存在するものにはそれなりの意味があるけれども、意味に軽重があることも忘れてはならない。ただ、1つ付け加えておくべきは、意味もまた一つひとつ作りだされる点です。たとえば「鋳物の町」の調査なんかも、「鋳物の町」はまた別なかたちで何度か調査されたらしい。東大の中にも、1960年代とおぼしき「鋳物の町」調査と書いた原調査票の箱があるのですけれども、それなんかは調査票レベルでは、単独ではあまりおもしろくないのです。おもしろくないけれども、一方に中野卓先生の1950年代の調査票データの塊があって比較対象みたいなものが出てくると、ひょっとすると新しい意味が出てくるのかもしれないのです。

だから、1つひとつの単位で、これは価値があるか価値がないかというふうな評価が、常に下せるかどうかは、私はちょっと慎重です。

**中澤**：後になってから、もっと若い世代の研究者が、実はこれはおもしろいのだと言い始めるということもあると思います。

**佐藤健二**：もちろんそれもあります。ですから、先ほどのSSMの調査でも、やはり第1回目、第2回目が行われて、第3回目でコンピュータというテクノロジーのある種の便宜を得た。その段階になってもういちど、第1回、第2回のデータの意義をつくり出されたという側面があると思うのです。

そこからどういう教訓が引き出せるか。やっぱり一定ていど、新たな解釈に対応できるようなデータの蓄積がもつ意味は大きいということでしょう。蓄積が死蔵であってもいい、その段階では、新たな問題意識が出た段階で、むしろ新たな利用を用意できるていどの資料の厚みがあれば、それでいいのではないか。

たとえばドーアさんの資料にしても、かな

りバラバラです。切り離された資料も含めて、バラバラなのですけれど、幸いなことに散逸していない。彼のファイルの中には、ともかくも比較的ぶ厚く残っているわけです。資料としてはドーアさんのファイルそのものもあって意味は壊してしまうかもしれないけれども、その代価を払ってももともとの調査票を復元の方がおもしろいという判断に傾けば、断片を抜き集めて調査票そのものを生かしていくという選択をするでしょう。そこまでを含めて、資料全体を評価していくことが必要なかというふうに思います。

**中澤：**もう少し新しい調査になってくると、逆にそういうおもしろさがなくなってくるかもしれないです。10年前だとか20年前だとかとなると、ほとんどすべてコンピュータに入力されたデータしか残っていないというようなことになる、今、発表して下さったような、非常に多次元的な見方というのは逆にできなくて、使えるのはコンピュータの資料だけみたいなことになってくるかもしれない。

そうすると、こういう学的な調査批判というのは、ある時代でおしまい、それからあとはもうできないというようなことになるかもしれない、今のお話を聞いて思ったのですが、

**佐藤健二：**かもしれないですね。

必ずしも現在の調査が一次元的な資料しか残していないとは思いませんが、コンピュータの利用のしかたそれ自身が、データの残るかたを変えていることはたしかでしょう。さらに、研究方法における質と量とが分かれてしまうとか、その辺の問題が反映している。だからどうなるのかという予言は、なかなかこれは難しい。記録の問題というのは、まだ方法論的に徹底して考え抜かれてはいないからです。

たとえば日本の中世社会を研究する上で、手紙は非常に重要で、いわゆる古文書の文書(もんじょ)というのは、基本的に発信者と

受信者とが明確にある手紙です。しかし今、手紙の集積が、その人のパーソナルヒストリーとか、ライフヒストリーを押さえる記録になりうるだろうか。『ポーランド農民』のような研究は、なかなか難しいと思うのです。電子メールが何かのかたちで残っていなければ、難しいと思います。しかし電子メールは残らないといってしまうことも、先走りです。たしかにメールは手紙の束のように残りにくい。紙は酸性化して消滅してしまうといいますが、複製されたりすると何かのかたちで残ったりもする。メールの残り方は紙とは違うでしょうけれども、意外なところに痕跡を残してしまう可能性も否定できない。我々の社会そのものがどのように記録されているかという大きな視点の中で、データライブラリーが意味を持つてくるということは免れないでしょうね。

**佐藤博樹：**Dore先生のああいう調査のoutputができるまでのプロセスを、やっぱり調査全体から総体的に見ていってという非常におもしろい話だったのです。けれども、最近の調査はそういう意味ではあまりおもしろくないのではないかという話になったのです。ただどういふ調査でもoutputなり、最終的なデータセットがどうできるかというプロセスを、できるだけドキュメント化しておかないとデータも使えないし、報告書も見られない。このメタデータは、データセットを読むのに必要な情報だと思うのです。それを、今まではコードブックと言っていたわけです。

メタデータとして何を残すべきかということ、ちゃんと議論した方がいいと思っています。先程JGSSについても、できるだけメタデータ、コードブックも強制的につくろうと思っています。通常は、サンプリングの仕方から始まって、調査票を載せるわけですが、やはり調査対象者への「お願い」や調査員に渡した文章資料を残していかなければいけないと思います。そういう中で、健二さん



からみてどういうものを少なくとも入れておくべきでしょうか。この点は原先生にも伺いたいのです。

JGSSは面接と留置きから構成されているのです。我々のコードブックを見ると、面接の時に使うカードは入れていない。もちろん、誤植はチェックしているのだけれども、カードにどう書かれていたかというのを、本当はコードブックに入れておかなければいけないのかもしれないです。印刷が無理であればCD-ROMの形にしたりして、調査票はイメージ、つまり調査票は色も含めて同じ色に印刷して入れてあります。

もう1つは、コーディング前のデータというの、ある程度アクセスできるようにして提供すべきなのではないか。つまりコーディングのプロセスを書いてあるわけです。たとえば月収300万円と書いてある。しかし、これは異常値として処理するかどうかということが書いてある。けれども、300万円と書いてある加工前のデータは、一般には提供していないわけです。保存はしておくけれども、そういうものの扱いをどうしたらいいのか、その辺をお二人にお伺いしたいのです。

**佐藤健二：**では先に前座を務めさせていただきます。

私が、新聞錦絵のデータベースをやったときに思ったのは、たとえば1つのCD-ROM、1つの情報媒体の中で全部完結するのを理想とするのは無理だということです。たとえば調査票の個票の画像データとか、いまの技術からすると統合できるものが増えてきた。そうした全部の情報が一つのデータベースに盛り込まれるようなかたちになれば、原資料としての紙媒体を廃棄してもよいという立場があるのだけれども、一方で、やっぱり図書館・文書館的なところは原型の形のままで資源として持っていてもいいのではないか。しかも現実にはCD-ROMにしても、そこまで完璧なデータの盛り込みかたはしていない。それならば

それぞれの形態を尊重しつつ、遡れるようなかたちの対応関係をリレーショナルにつくっておけば良いのではないかと思うのです。つまり本当にすべての情報を、たとえば紙質とか、そんな情報を言葉で描写するのは絶対無理です。現物を本当に見なければわからない情報まで必要な人は、たどってアクセスできるような構造にしておけば良いと。

そもそもデータベースというのはリレーショナルなものであって、データライブラリーに向かって開かれているはずで、単独のデータベースとして完結しなくても、遡及できる情報を内包していればいいので、いわば論文における文献注のようなものです。そういうレベルを用意しておいていいと思うのです。そうでないと、複雑になりすぎる。たとえば実際に新聞錦絵にみたいなものでも、本物に当たらないとわからない水準での知識というのがかなりあるのです。それは、そのレベルを越えて来た人に、あるいは必要を論議する人に対応すればいいのではないかというふうに思うのです。

それからもう1つ、考え方の基本としては、やっぱり調査というのは、ある1つのコミュニケーションでしょう。そのコミュニケーションを成り立たせている現場があるわけですし、現場にもどって考えることが必要です。そして、そのような意味での現場の在り方に依存して、記録しなければならないものが決まってくるのではないかというふうに思います。

**原：**調査票そのものの公開については、これはいろいろな問題があると思いますので、私自身にそういう気はありません。原則はそうなのですが、場合によってはアクセスできるようにしておくというのが、調査によっては大事だし、私なんかはこれで非常に救われたわけです。

あと、話が出なかったのですが、私の個人的な経験でいうと、コードブックはもちろん公開されるわけですがけれども、職業のコーディ

ングというような作業は、実はコードブックだけでは決まらないような面があるのです。実際、こういうような回答はどうコードしたかというようなことは、私は95年と85年については、私が記録係になって、ノートをとって、全部記録しているのです。そうすると中間領域みたいなものもあるし、それからこうはコードしたんだけど、他の方が判断するとどうもこれはこっちではないかとか。そういうような、微妙な部分の記録で、そんなものをどう共有財産にしていくべきかというのは、私自身もちょっと迷っています。

それから今、話したついでなので、ちょっとまた一言だけ弁明しておきます。

例の質的量的ということ、二項対立みたいなにした力が大きかったと御指摘のあった、福武先生の『社会調査』ですが、そのことで昨日ちょっと考えたことがあるのです。

実は私は、あの本の補訂版に関係したという事情で、3分の1の著作権と責任を持っているのです。福武先生と安田三郎先生と私です。いまでもよく売れておまして、福武先生のお嬢様にお目に掛かると、「娘の（つまり福武先生のお孫さんですね）のお小遣いを稼いでいただいて」と感謝されます。先程、社会調査の教科書が盛んにあの頃は出たのだけれども80年代はというような話がありましたよね。あげられた要素は、間違いのないと思うのですけれども、もう一つ、『社会調査ハンドブック』にしても、『社会調査』にしても、それを担当した編集者の、情熱みたいなものがあれを支えてきたという面があるのです。それがあるから何度も改訂版が出たりとか、補訂版が出たりするのです。

これは裏話になるのですが、1983年頃、福武先生に『社会調査』を書き直してほしいというふうに言われて、眺めていたのですけれども、ご批判はあるものの、あれはあの時期の名著なわけで、なかなか手を下しかねました。その時に、編集者に呼ばれているいろ

話をして、こういう理由でなかなか難しいというふうに言ったら、それでは多少古めかしいところがあるかもしれないけれども、それも残しつつ、いくらなんでもというところだけを書き直してということになって、補訂版をつくったのです。

補訂版はあくまで補訂版であって、岩波全書の教科書という性格からいけば、全面的な改訂が望ましいと思います。しかし、岩波書店では岩波全書を新しく発行する予定はないようですし、何よりも担当の編集者がすでに定年退職してしまっています。そういう戦後の第一世代の編集者みたいなものが、岩波書店とか有斐閣とかで、調査を通じた民主化というような志向を共有していて支えていたのだけれども、その人たちが退職するみたいなことによる、そういう側面もあるような気がします。

結論としては、あの『社会調査』は歴史的書物として扱われるのが適切ではないか、そんな風に考えております。

**佐藤博樹**：原先生が言っていた職業分類について、確かにそうです。コードブックがあって、職業の分類表があっても、結果だけわかっていて、そこにどういうものを入れてあるのかということが分からないのです。

今回もJGSSの統一の分類では、どっちに入れていいのか迷うのがたくさん出てきたので、それだけについては別に、ワーキングペーパーを作って、どういうふうに分類したのか、他のコードが、まあ他に学歴とか年収とかいろいろなものを見て、あるいは産業みたりして、これはこっちにということ、同じ記入内容でも分けているわけです。そういうものを、1度まとめるものを出すということにしたらどうですか。

まあ、それはコードブックには入っていないのですが、ワーキングペーパーとしてするようにはしてあります。

**佐藤健二**：踏み込んで言わなかったのですけ

れども、私は書物の構造と同じ複合性を調査データライブラリーに感じているのです。たとえば注のような情報もある、索引もあって、目次もある。そういうような世界が1つの書物の中にある。同じようにデータライブラリーにも注のかたちで、コードブックやワーキングペーパーなど、いろいろな雑多な情報があって良いと思うのです。

注釈はやっぱり本文とは違うわけだから、注釈は注釈として固有の意味を読むべきだろうと思うし、それは注釈をつかった編集なり改訂者・編纂者を物語るデータとして重要です。注記がしっかりしていれば、原典というか論拠にまで遡って批判することができる。どんどん注を増やしていくような介入的な読解があっていいのではないかと思います。

索引にしても、その発生それ自体が、じつはテキストの読み方の進化と対応しているといってもいい。そういうのを考えると、それ自身が1つのテキスト批判力の指標ですらある。

それで思い出したのですが、たとえば質問文そのものを分類索引の対象とするなかで、社会調査の実践的な知識のある形での集大成が発展した。これはまた原先生から歴史的な証言が引き出せるのかも知れないのですけれども、私は安田三郎先生の『社会調査ハンドブック』というのはユニークな名著だと思っています。私自身は質的な分析を重視する陣営にいますと思われていますけれども、あの本の発想にはちょっと感心する部分がある。

その一番大きな理由は、『社会調査ハンドブック』の質問項目が、現実に使われたものを集めるという発想の中で構成されている点で、その意味でいうと既存の問いかけの索引なのです。その点が、真似してつくられた『民俗調査ハンドブック』との大きな違いで、そこではありそうな質問を自分でつくってしまっている。じっさいに質問として使われたものと、こんな聞き方もあるという思考実験

とでは、意味が大きく違っていて、ぜんぜん似て非なるものになってしまうと。

その点では『社会調査ハンドブック』の発想そのものは、社会学の社会学、社会調査の社会調査というような局面があった点で、安田先生の慧眼だったなと思うのです。

**司会：**ちょっと1つ質問です。そもそも調査はある当該テーマに対して何らかのかたちで知識を確定するという目的のもとで行われていると思います。調査の方法は、そういう意味でどんどん標準化していった、なるべく異論の余地のないかたちで、数量化も含めて、そういう方向で現代化してきたと思うのです。

他方で、非常に歴史的な調査の経緯だの、資料だのを振り返っていたときに、そこから標準化された調査とはちがったものが見えてくるというふうなお話しだったと思います。

そういった点を踏まえて、改めて質問なのですが、そういうふうに調査プロセス全体をとらえる観点から、質的／量的という区別をどのように用いれば、より生産的になるのでしょうか。あるいはそれを越えることができるのでしょうか。その点を、少し補足をお願いできればと思います。

**佐藤健二：**『見えないものを見る力』（八千代出版）を読んで下さい、と言うと、宣伝になってしまいますが、この本の第三部を書くときにもっとも注意して考えていたのは、この対立をいかに無害化するかでした。質的／量的という2項対立があまりに巨大化してしまったので、いろいろな考えかたの硬直が現れてきました。研究法の分類としては、私は廃棄してしまった方がいいとすら思っていますけれども、この言葉で表そうとしてきた違いみたいなものは、範囲を限れば有効性もあるので、単純なことば狩りのようなことはしたくない。

福武直『社会調査』を批判したのは、研究法のレベルでの分類であると同時に、質的とは非数量的でと、身動きしにくい、閉じた対

立軸をつくったことにあります。社会学が蓄積してきた議論でいうと、たとえば伝統と近代とか、集団と個人とか、歴史と現在とか、そういう概念が危険なのは、二分法の自己増殖に陥りやすいからです。質的/量的も、インテンシブ/エクステンシブ、事例/統計などにすぐ結びつけられ、その辺だとまだ良いけれども、果ては主観的か客観的か、選択肢か自由回答かのようなレベルまで、それぞれの論議の水準の違うものをみんなつなげてひとくくりに対立させる、大文字の対立概念にしてしまったことこそが、問題の根本だと思うのです。

ですから、もっと適用範囲を限って、具体的な効果を限って使っていくという以外にはなく、その邪魔になるようであれば、使わずにすませる。2項の形容詞は閉じた関係を作りやすいですから、3つ概念を出して比較してみるといいかもしれません。弁証法だって3つだせばこそ、動きが生まれる。第3の変数が介入する関係の中で、第1、第2の変数が揺らいでいきますよね。そのような形に、質的/量的のいささか無内容な相互依存をちょっと揺るがしていく方が、私は生産的だと思うのです。

ところが、質的方法の有効性をつよく主張する人たちの方に、何と言えれば良いのでしょうか、量とか標準化調査を物神化するような理解がかたくなな形で再生産されていたりする。たとえば原先生が編集された数理社会学の論文集では、不定形不定長データの処理に関する論文や、文章データの解析などに取り組んで、むしろ哲学的に単純な意味での質/量にあまりこだわらずに、コンピュータという道具をどうやって使うのかを議論をしている。その点では、もっと深く対話しようと思うのです。

まあ2年ほど前の関東社会学会で、質的調査/量的調査の区分なんかそれほど有意味ではなくて、世の中にはいい調査研究か悪い調

査研究しかないと言ったら、身も蓋もないと、質的調査研究の推進を唱えている方々に嫌われましたけれど。

**小内：**私もあまり2項対立的にはとらえていません。要するに知りたいことがわかることが重要で、そのために何が一番いいかという考え方なのです。質的な調査に関しては、かなりトータルな資料の残し方をしないといけない、かなり解釈的なところとかありますから。

その人はどうしてこういうふうにしたのだろうという。調査票をつくるために、結構機関調査とか、農村調査であれば農協や役場の農政課はとか、いろいろな担当者から聞いているわけです。

そういうふうには、いろいろなことを聞きながら調査票をつくっていくわけですから、その調査票だけをデータベース化した場合には、その人がなぜそういう最終的に結論になっていったかということが見えてこないのではないかと思います。

単純にこういうデータを集めたらいいというふうには言えないような、その調査独自のデータの集め方をしないと、なかなかデータベースとして、違う人が利用するのは難しいかなという印象を持っています。

**佐藤健二：**おっしゃる通りで、収集にもあらかじめの限定があるわけではありません。作品としての調査票とか、著作としての調査票と言いましたけれども、普通は著作としては考えられない。つまり、調査票をつくったからといって、論文として評価されるということはないわけです。これは調査実践そのものを評価していくうえでは、一つのネックかもしれません。

たとえばライフヒストリーの方でかなり評価をされた中野卓さんの『口述の生活史』は論文なのかと批判されている。本人もたしかに「編著」と書いているので、そういう意味で言うと、資料集にすぎないという議論もあ

る。しかしながらそのうえで資料を収集し資料集を編纂すること、集めるための枠組みをつくり、あるいは資料を資料集として一覧し走査するための仕組みをつくるこそのも、きちんと評価されるべきだと私は思う。論文と同じ規準で評価するというのではなく、社会学という認識の生産にとって重要な1つの仕事として評価する視角は必要であると思うのです。

他人の理論の一部分だけを引用して形だけ論文になっている継ぎ接ぎを、ともあれ論文だと評価するくらいなら、調査実践のための

さまざまな前提をふまえた上で、調査票をつくる努力を、単なる準備段階の力仕事だという以上に評価していい。このようなやや不均等な評価のなかにある、理論と調査との関係も少し再検討していく必要はあるだろうと感じています。

**司会**：時間がまいりましたので、そろそろ締め切らせていただきます。今日、やり残した議論は明日じっくり時間を取りますので、その中でご議論いただければというふうに思います。佐藤健二先生、どうもありがとうございます。